

【優秀賞】

海と世界と空の中

下條 円雅（東京都 学習院女子中等科 3年生）

小さい頃、私の夏は海だった。家から海岸まで歩いて五分とかからない距離に住んでいたし、家の外に出るといつもかすかに潮の匂いがした。夏休みになれば、日焼け止めを塗った上にラッシュガードを着るといふ紫外線完全防備体勢で、毎週末、父と海に出かけたものだ。

幼い私が見た海水浴場は、宝箱の中のように全てがキラキラと輝いていた。色とりどりの水着、ところどころにできてきている砂の城、手を切るから危ないと怒られても拾うのが大好きだったシーグラス、薄桃色で割れていないものを見つけるのが難しかった桜貝。当時の私にとって「夏の海に行く」ことは日常とは違う別世界に飛び込んでいくような、想像しただけで楽しくなれるような夏のイベントだった。公園の砂場よりもはるかに広い砂浜には、砂場にはない綺麗な貝が沢山落ちていたり、浮き輪で海に浮いている時に巧く大きな波に乗れば、それは私にとって遊園地のジェットコースターよりも楽しいアトラクションになった。たまに巧く乗れずに波にもみくちゃにされて、目と鼻に海水が入り込んで痛くて塩辛くても、不思議と泣きたい気分にはならなかった。水面に顔を出せば太陽の光を反射した水面は白い光を放って

いたし、砂浜の方には飛び交うスイカ柄のビーチボールや風にはためくビーチパラソルが見えて、そんな海から見る景色が大好きだった。

ゆらゆらと揺れる波に身を預けるのはとても心地良い。海は地球の表面積の七割を占めていると聞いたことがある。大きなものに、自分は今溶け合うように一つになっているのだと不思議な感動に襲われ、自分が小さくも大きくも思えた。でも、たまに得体の知れない不安に襲われた。こんなに小さい私が大きな海の中にいるのだ。近くにいた父が流されて遠くに行ってしまうえば、浮き輪が波にさらわれれば、一人ぼっちだ。手を伸ばせば届きそうなほど空と太陽は近かったけれど、決して届くことはなかった。

今、私は海から遠く離れた街に住んでいる。海に行くこともほとんどない。でも夏になると、小さい頃に遊んだあの海水浴場のことを思い出すのだ。あの夏の海はとても楽しかった。ただ波に揺られ、砂浜の人々の中に混ざっているだけで幸せな気分になれた。でも、もう私は中学生になった。おそらく、目を輝かせることはあの頃よりも減ったし、何もかもがうまく行かなくて落ち込んだり、自分や友達を嫌いになりかけたり、その苛立ちを家族にぶつけてしまったり。そんなときの感情はあの宝箱のような海とは正反対だ。でも、そんな下を向いてしまいたいような時にふと上を見上げると、そこには海の上でも、私がいる場所でも変わらない空がある。時に晴れ渡って青空を見せ、時に厚い灰色の雲で覆われて雨を降らせ、時に燃えるような赤とオレンジの綺麗なグラデーションを見せてくれる。空を見上げて、海の中にいるような気持ちになることがある。私は、あの空の下にあるこの世界で生きている。私はこれまで、この世界に溶け込むように自分が生きていくと思っていたし、そうしてきた。溶け込まなければ、

広い世界の中で一人で取り残されてしまう。でも溶け込んでしまっただけで、自分が自分でなければいけない意味がなくなってしまう。この間、一人で家にいる時に激しい通り雨が降った。一人の家の中でふと気付いた。溶け込むように生きるのは、つまらない。日々表情を変えていく空のように、私も思ったことや考えたこと、感じたことのままに行動しても良いのではないか。

そう思ってから、少しだけ日常が私にとって良いものになった気がする。好きだと思っただけのもの、綺麗だと思っただけのもの、口にした方が絶対に自分の記憶に残る。写真は見えないと思いつけないこともあるが、記憶のなかに鮮烈に残るものは写真を見なくても思い出せる。むしろ感情に素直になった方が綺麗なもの、好きなものが沢山見つけられた。それが周りの人と違ってそれで良いのだということに今更気付けたのだ。小さい頃に、海に一人取り残されたようで不安になった時も、浮き輪はずっと私を支えていたし、父は少し離れたところにも呼べばすぐ隣に来て一緒にいてくれた。小さい頃の別世界のような綺麗な思い出の中ではなくても、今私が生きている現実世界の中でも綺麗なものは沢山あった。思ったことをほんの少しだけ主張してみてもそれを疎ましいと思う人は少ないし、埋もれてしまい自分の主張ができず、ぼんやりとした曖昧な日々を過ごすより全然良い。

今日もまた空を見上げて、あの夏の海を思い出す。嗅ぎなれた潮の匂いと打ち寄せる波の音がよみがえってくると、私はまた、少しだけ幸せになれる。